原　著

多種多様な心理学の多様性と共に生き対処する在り方について：

諸々の心理学の＜混沌＞の世界に生きる研究者／実践者、教育者／学習者にとっての問題

大学院総合福祉研究科
教　授　吉　田　章　宏

原　著

多種多様な心理学の多様性と共に生き対処する在り方について：

諸々の心理学の＜混沌＞の世界に生きる研究者／実践者、教育者／学習者にとっての問題

大学院総合福祉研究科
教　授　吉　田　章　宏

はじめに

臨床心理学の実践としての心理療法の＜実践・研究者＞———実践家、理論家、研究者、教育者、及び学習者など———は、それぞれに、多種多様な心理療法と臨床心理学の多様性に直面し、この多様性に如何に対処するか。この問題に、それぞれは、それぞれに、悩み苦しむ。しかし、この事情は、実は、臨床心理学の世界に限らない。より広く、心理学一般の世界でも、より一層の多種多様性が、同様の問題を＜理論家・実践家・研究者・教育者・学習者＞に提起し、それぞれは、それぞれに、悩み苦しむことになる。そこで、本論では、心理学の多種多様性と共に生き対処するという問題を主題化して、その意味と構造の解明をめざす。そして、その解決への道を探る。

多種多様な心理学の多様性と共に生き対処する

世の中には、多種多様な心理学がある。生まれて初めて心理学の世界に入る無知で無垢な初学者は、それとは知らずに、最初に偶然に接し知ることになった心理学が、心理学そのものだ、いや、それが心理学全体なのだ、と思い込む。これは、無知と無垢によるまどろみの幸せなひと時の状態のようにさえ思われる。幼子にとってその母親こそが人間のすべてであるのと同様である。しかし、心理学の学習が進み、その状態から徐々に進むと、学習者は、今度は、次第に多種多様な心理学を知ることになる。そして、それらの心理学の相互関係が＜秩序＞（コスモス）とは見えず＜混沌＞（カオス）としか見えない状況に直面するに到って、為すすべもなく茫然として佇む。そして、そもそも、それが現実に＜混沌＞であるのか、あるいは、その時点における自らの無知のゆえに自分にだけ＜混沌＞と映っているが、実は未知ではあるが複雑な＜秩序＞がそこに在るのか、ということについてさえ確信がもてなくなり、自信喪失し、不安と混乱のうちの憂鬱の淵に沈む。ある人は、＜混沌＞に幻滅して、心理学の世界をいっそ離れようか、とさえ悩む。また、ある人は、その混乱と不安から逃れるために、手の届くところにあった心理学に「藁をも掴む思いで」しがみつき、その後は、心理学徒としての生涯を、心理学の専門家として、最初は「藁」として掴んだ、その特定の心理学一筋に、わき目も振らず、その生涯を生きる。また、ある人は、その＜混沌＞に何らかの＜秩序＞を見出そうとして、もがき苦しみ続け、多種多様な心理学の間の彷徨のうちに、右往左往しつつ、その生涯を過ごす。心理学徒は、必ずしも、孤立して単独で生きる訳ではない。どの学問世界でも同じであろうが、特定の心理学の学びと研究を通して、互いに心を通じ合える仲間が、あるいは、その特定の心理学を巡る利害を共にする集団が形成される。時には、研究上の論戦の敵味方に分かれて、それぞれが信奉する心理学の存亡を賭けて、相互に入り乱れて戦うことさえある。心理学徒は、独りで生き独りで戦うというわけでは必ずしもない。心理学の学派の間の戦いがある。それは、さながら「源平盛衰記」の物語のようでさえある。心理学についての「方丈記」が書かれてもよいくらいであろう。しかも、心理学の世界全体の潮流は、時の流れとともに、めまぐるしく変わる。それぞれの潮流の中で、ある流派の心理学は栄え、別の流派の心理学は衰える。その栄枯盛衰の変化の様相は、時代、社会、文化、あるいは、国家により、これまた多種多様である。その潮流の激しい変化は、大多数の心理学徒が、全体的に見て、時の流れに自らの身を任せて生きるという生き方を採っているということの結果だ、と見ることもできる。しかし、変化の絶えることのない激動の心理学の世界で、一人の心理学徒としての自らの生涯を自覚的に誠実に生きるには、その急激な変

化に、その時々に、何らかの対応をして生きていかなくてはならない。変化に従順に順応するか、それに頑固に抵抗して生きるか。変化そのものの生起を否認するか。変化をめぐる抗争を第三者として傍観するか、などなど、その対応の在り方もまた多種多様である。激変と共に戦う仲間や集団を、その時々に、自ら選び取るのも、対応の一つの在り方であろう。そして、さらに、その心理学徒としての対応は、無自覚的でも、自覚的でも、あり得よう。自覚的である場合、どのように自覚的でありうるのか。いずれにせよ、そこには、それぞれの一人の人間としての、その生涯の生き方が、賭けられている。

「心理学の多種多様性」の意味は何か。それを、安永浩のパターン「A／B」の思想によって、主観的にも客観的にも、考えてみたい。

一人の心理学徒である私は、心理学の激変の時代を生きたように、私自身は思っている。戦後まもない1958年に、心理学という未知の世界に紛れ込んだ私は、ゲシュタルト心理学の時代の残響を聞きながら、米国渡来の数量化心理学の全盛時代に参入し、新行動主義の全盛を米国で目撃し、さらに認知心理学の誕生を喜び、近年は、臨床心理学の興隆を身近に経験、質的心理学の登場を目撃している。さらに、その時代の中でも、個人的に、私自身は多種多様な心理学を生きたように思う。数量化、尺度化、因子分析、潜在構造分析、ガットマン尺度、などに熱中し、ついで幻滅の悲哀を味わう。一転、波多野完治先生のお導きによりルビンシュテインの弁証法的唯物論心理学、ピアジェ発生的認識論へ、さらに、オースベル心理学、アシュビーのサイバネティックス、一般システム論、情報理論、ブルーナー流の認知心理学とさらに彷徨のすえ、斎藤喜博先生の「教授学」運動に参加して、日本全国の諸学校を訪ね十年の経験を重ねた。教育実践と心理学研究の狭間で悩み苦しみ、神谷美恵子先生の『生きがいについて』を手掛かりにその諸著作との出会いを経て、現象学的精神病理学、現象学から現象学的心理学に辿り着き、やっと「安んじる」に至り既に三十年になる。そうした個人的歴史について述べることはここでは極力避けておきたい。ただ、その個人的歴史の経過の中で、＜多種多様な心理学＞と＜心理学の多種多様性＞については、いろいろと考えさせられて来た。そこで、私自身の反省と洞察を深めるとともに、これからの心理学を担う若い読者の方々への“Food for Thought”としての贈り物となることを願って、ここに以下を記すこととする。

「動物園」か「牧場」か

1980年の秋から81年の夏にかけて、私は、米国Pennsylvania州のPittsburgh市の小さなカトリック系の私立大学Duquesne大学の心理学部に、Fulbright Senior Researcherとして滞在していた。大学内部では大学院生の寮に単身生活するVisiting Scholarという身分であった。当時、Duquesneの心理学部は、全米でも特色ある、現象学的心理学のプログラムで世界的に広く知られていた。1980年の秋、その大学図書館に、Simon Silverman Center in Phenomenologyが開設され、現象学関係の図書や論文が収められることになった。さらに、同センターには、Erwin Straus AlcoveとAron Gurwitsch Alcoveが創設された。それぞれに著名な二人の現象学的心理学者が遺した蔵書を納めるコーナーである。その創設の記念式と記念パーテーが開かれた。パーテーの席上で、ちょうど私が読んでいた*Journeying Self*の著者である白髪白髭の哲学者Maurice Natanson教授と会話を交わす機会に恵まれた。教授は、当時は確か、Northwestern大学に所属しておられたように記憶している。さて、その教授が、心理学科について、「動物園」（Zoo）か「牧場」（Farm/Ranch）か、という比喩を溢れんばかりの笑顔で私に語ってくださった。たとえば、一方に、内観主義心理学者、行動主義心理学者、精神分析学者、認知心理学者、現象心理学者、などなどが、混在し共存共栄している心理学科が考えられ、それを、多種多様な動物が共存している「動物園」と名付ける。他方に、行動主義心理学者なら行動主義心理学者だけ、現象学心理学者なら現象心理学者だけ、一種類の「動物」それだけが居る心理学科、つまり、どれか一つの流派の心理学者だけが居る心理学科が考えられ、それを「牧場」と名付けた、というのである。そして、Duquesne大学の心理学科は、珍しいことに、現象学的心理学者の「牧場」である、とユーモアを込めて評されたのであった。米国の大学の心理学科といえば、恐らく、大多数は「動物園」型であって、当時のDuquesne大学のような「牧場」型は、仮にあったとしても、ごく少数だったであろう。もっとも、「現象学」の牧場にしても、その中にしばらくでも棲みついてみると、そこには、フッ

サールあり、ハイデガーあり、そして、ディルタイ、ヤスパース、メルロポンティ、サルトル、ガダマー、リクール、シュッツ、…、と個性的で多種多様な「生き物」がそれぞれの歴史を背景に棲息していることにも、気づくことになる。

では、心理学の学生と研究者にとって、そこで学ぶには、「動物園」がいいか「牧場」がいいか。それは何故か。この問いは、「多様な心理学」と「心理学の多様性」の問題ともつながってくる問いであることに、その後、私は、繰り返し気づくことになった。

「各人は各人の心理療法を持つ」（"Jeder hat seine Psychotherapie."）：霜山徳爾

臨床心理家・霜山徳爾著『素足の心理療法』（みすず書房）は、汲み尽くすことのできない豊かな智慧を湛えている。いわば清水溢れる清泉にも譬えることのできる名著である。その一節に、私にとって、ひときわ印象深い文章がある。少し長くなるが引用する。

「もともと私はつねに教室員に、サリヴァニアンとかフロイディアンとかユンギアン、ロージャリアンなど、とにかくianのつくものに早々になるな、ときびしく戒めている。現在の多くの若いすぐれた臨床家…私のような去り行く臨床家が望みを託している…が、あまりに早く小粒のスペシャリストになり、真の心理臨床家に必要なゼネラリストになることから逃避するか、あるいはそれへの努力をやめてしまうことがもっとも気になる。心理療法にはおしきせは存在しないのである。各人はおのれの器量に合わせて労苦を重ね、…『各人は各人の心理療法を持つ』（"Jeder hat seine Psychotherapie."）ことが重要なのである。それには長い道程が必要である。臨床を中心とした教室ではあるが、私は教室員に自由に何でも好きなことをさせている。したがってある者は精神分析の教育分析を受け、あるものは行動療法、またそのほかにゲシュタルト療法、箱庭療法、絵画療法、音楽療法、舞踏療法、心理劇、内観療法、森田療法などまことににぎやかで、教室の色彩が統一されていないとよく批判される。しかし私はそれらを単なるpassing identity ［引用者注：いずれは移り変わって行くことが予期される、一時的な（自己）同一性］ として黙って暖かく見守っている。…」（霜山徳爾、1989、150）

言いかえれば、霜山徳爾先生ご自身は「私は現象学的、人間学的精神病理学を専攻してきたが、」（同所）と述べておられるにもかかわらず、霜山教室は、Natansonの言葉を借りれば、「現象学的、人間学的精神病理学」の「牧場」ではなくて、多種多様な心理学と心理療法の「動物園」となるに任せている、ということだ、とも理解される。つまり、教室員の全員が「現象学的、人間学的精神病理学」を選んでいるのではない、ということである。ここで、大切なことは、それぞれの学生、大学院生、あるいは研究者が、それぞれに「自由に何でも好きなこと」をしているとしても、その「何でも好きなこと」は、それぞれのある時点における "passing identity" である、と霜山教授は見なしていて、「黙って」（つまり、あれこれと指示したり、批判したり、強いたり、しないで）、「暖かく」（つまり、冷たくではなく、否定的にではなく、どちらかと言えばそのことを肯定的に、そして、受容的に、包むように）、「見守っている」（つまり、それぞれのその在り様に、絶えず心を配りながらも、しかし、それぞれの主体的な活動と選択に任せている）ということである。さらに、そのことは、霜山先生が、自らの立場として、「私は現象学的、人間学的精神病理学を専攻してきたが、」ということと矛盾対立することだとはしておられない点が、私には、特に注目される。そうした霜山先生の教室員に対する在り方には、鋭く深く温かい人間洞察が秘められていることが推測され、その在り方の意味の、軽率で安易な解釈や忖度は許されない、と私には強く感じられる。ただ、上の引用文から明瞭に浮かび上がってくることは、心理療法の世界において、先生ご自身がある一つの流派に属するとしても、そのお弟子さん、生徒さんたちのそれぞれには、多種多様な流派に、少なくともその教室員としての或る限られた時期と期間は、それぞれに熱中することを、むしろあたかも奨励するかのように、先生が「暖かく」受容しているということ、である。しかも、その根底には、そのような熱中の時期は一生涯続くわけではなくて、それぞれの＜passing identity＞として、いずれ将来は、それぞれに、それぞれの仕方で、それぞれに相応しい在り方を、したがって、それぞれがその時点で熱中しているものとは異なるかもしれない、それぞれに相応しい心理療法を発見して行くであろう、ということを洞察し、その洞察を心底から確信し、恐らく、その洞察の実現を祈ってもおられるらしい、ということである。

そこで、問いが生まれる。霜山先生は、自らがよしとして信じておられる「現象学的、人間学的精神病理学」を、教室員の総てに学ぶことを求め、かつ、自ら教えて、その世界へと導き入れ、その流派の「牧場」になさろうとは＜何故しないのか＞という問いである。いや、霜山徳爾という特定の方の認識や信念や在り方を問うこと自体が、ここでの直接の問題なのではない。私は、ふと、武田常夫の「教えないことが教育だ」(1990、43) という言葉を想起する。また、蘆田恵之助の「響きを生ずべき急所をうって、響きを聞こうとする」(1973、96－97) という優れた教師の在り方についての記述も想起する。そして、そこには、教育の問題として、普遍的な問題が秘められていることが直観される。

ここで考えてみたい問題は、霜山教室の在り方を一つの事例としながら、上記のような、「心理学の多様性」と「心理学徒のその多様性と共に生き対応する在り方」の意味の問題である。そして、時間的な流れの中での、現在の時点での、それぞれの多種多様な心理学徒の＜passing identity＞から、将来は、次第に、それぞれの＜identity＞に到達するであろう、という信念にもとづく見通しを踏まえた、現在の時点での心理学徒たちへの対処の在り方である。さらに、＜passing identity＞（ひと時の自己同一性）であろうと、＜lasting identity＞（永続的な自己同一性）であろうと、そこに多種多様性が収斂して、一様性になることが期待されているわけでは、どうもないらしい、ということも、上記例においては、私にとって、おおいに注目されるところなのである。そして、そのような信念による見通しに基づく、心理学における指導者としての対応の在り方の意味と構造の解明が、ここで浮かび上がってくる問題なのである。ことに、指導者自身は、個人としては、ある特定の心理学の流派の適切性を確信していながら、その弟子たちを、その特定流派に積極的に強いて導き入れようと試みるのではなくて、それぞれの選んだ流派を集中して学ぶ姿を、仮にそれぞれの＜passing identity＞として認めるという限定された在り方ではあるにせよ、「黙って暖かく見守っている」という在り方の意味である。さらに、その在り方を支えている、「心理療法にはおしきせは存在しないのである。各人はおのれの器量に合わせて労苦を重ね、…『各人は各人の心理療法を持つ』（"Jeder hat seine Psychotherapie."）ことが重要なのである。それには長い道程が必要である。」という考え方がもつ意味である。ことに、「おしきせは存在しない」、「各人はおのれの器量に合わせて労苦を重ね」、「各人は各人の心理療法を持つ」、「長い道程が必要である」、という考え方の間の相互関係と、それらの考え方全体の調和の問題でもある。

ここで、この基本問題と関連して、霜山先生が「自灯明」(「おのれの道をおのれで選び、その明りを照らしてすすむこと」) を説いて、「各人は各人の心理療法を持つ」(前出書、9) ということは「それほど容易なことではない」として、次のように書いておられることも、心に留めておかなくてはならないであろう。すなわち、「自分の器量に適合した方法にまで到達しないで、自分が最初に接した流派にそのまま巻き込まれてしまう人々も少なくない。」さらに、「本当にその人の器量に向いているものは、長い間の真摯な模索の果に、いわば向こうからきてくれるものである。したがって自分でやたらに焦慮して主観的にはからうのは禁忌である。」(同書、9－10) という洞察である。

以上を考えると、心理学の多種多様性、それに対応する心理学徒、それらの心理学徒を導く心理学の指導者、それぞれの時間の流れにおける在り方の問題が、全体として、浮かび上がってくるように、私には感じられる。そして、これらの問題の意味と構造を、霜山徳爾先生の鋭く温かく豊かな洞察にも学びながら、私の立場から、より主観的にも、また、より客観的にも、つまり、安永浩のパターン「A／B」として、解明していくこと、それが、いま本稿で、私が自らに課そうとしている課題である。

「心理学科」は「心理学的諸研究の学科」と呼べ：解決不能なジグソウパズル：S.Koch

ところで、上記のような問題は、比較的狭く「臨床心理学」あるいは「心理臨床」の世界の問題に留めず、さらに広く「心理学」一般の問題として、改めて問うこともできる。同様の問題が、心理学全般にも、確かに存在するからである。

米国で、長年にわたって心理学の著名な教授として、多くのすぐれた業績を挙げていたSigmund Kochの言葉がある。その言葉を、以下に紹介する。私の偏見の混入を可能な限り少なくするために、つまり正確を期するために、まず原文を引用する。

"I am under no illusion that huge subcartels of the knowledge industry can be made to reorganize by rational suasion. I nevertheless propose that the essential noncohesiveness of the activities denoted by the term 'psychology' be acknowledged by replacing it with some such locution as the 'psychological studies'. Student should no longer be tricked by a terminological rhetoric into the belief that they are studying a single discipline or any set of specialties rendered coherent by any actual or potential principle of coherence. The current 'departments of psychology' should be called 'departments of psychological studies.' The change of name should mark corresponding change in pedagogical rationale. The psychological studies, if they are really to address the historically constituted objectives of psychological thought, must range over an immense and disorderly spectrum of human activity and experience. If significant knowledge is the desideratum, problems must be approached with humility, methods must be contextual and flexible, and anticipations of synoptic breakthroughs held in check. At the very least, students should not be encouraged to believe it their responsibility to put together the pieces of a jigsaw puzzle that their professors long ago gave up trying to solve---a puzzle which is insoluble in principle, and which has the strange property of becoming less solvable with each attempt to assemble the fragments." (Koch, S. 1999, 134-135)

上の英文を、出来るだけ直訳体で逐語的に訳すことを試みるならば、以下のようになる。

「この[訳注、心理学という]知識産業の諸々の巨大なサブ（下位）カルテルが、理性的（合理的な）な説得によって再組織化されうるなどという幻想を、私は決して抱いてはいない。しかしながら、私は次のように提案する。『心理学』という語で指示される諸活動の本質的な纏まり（凝集性）の無さは、『心理学』という語をたとえば『心理学的諸研究』というような言い回しで置き換えることにより、自ら認められるべきである、と。(心理学の）学生たちは、術語のレトリック（美辞）に騙されて、もはや、自分たちが、纏まりについての、何らかの現実的あるいは潜在的な、原理によって、纏まりあるものとなっている或る単一の学問あるいは諸々の専門の何らかの集合を学びつつあるのだ、というような信念へと、導き入れられるべきではないのである。現行の『心理学科』は、『心理学的諸研究の学科』と呼ばれるべきである。呼称のこの変更が、教育上の理論的根拠の、それに対応する変更を際立たせるべきである。それらの心理学的諸研究がもし本当に、心理学的思想が歴史的に構成してきた諸目的に向けられるべきだとするならば、それら諸研究は、人間の活動と経験の巨大で無秩序な範囲にわたって広がり及んで行かなくてはならない。仮にもし、意義ある知識が切実な要求であるとするならば、諸問題への接近は謙虚の念をもってなされなければならないし、諸方法は脈絡によって（変化するよう）柔軟でなければならないし、また、全般にわたる進歩躍進への期待は抑制されなければならない。最低限でも、(心理学の）学生たちは、或るジグソウパズルの断片をつなぎ合わせ纏め上げるのが彼ら自身の責任であるなどと信じることを促されるべきでははい。そのパズルたるや、彼らの教授たちがとっくの昔に解くことを放棄してしまったパズルなのだから。そして、そのパズルは、原理的に解決不能であり、その断片を纏め上げようと試みる度に、ますます解決が難しくなるという奇妙な特質をもつパズルなのであるから。」

翻訳文で、原文の微妙な陰翳を伝えることはたいへん難しい。読者は、それを原文から、直接、読み取っていただきたい。

さて、以上の文章が、ほかならぬSigmund Kochによって書かれている、という点が、私の目には、きわめて重大なものとして映る。なぜならば、彼こそは、あの大著6巻の***Psychology: A study of a science***（1959－63）の単独の編者（the editor）その人であり、***A Century of Psychology as Science***（1992）の共編者としても著名な、少なくともアメリカ心理学の歴史と現代の状況に、アメリカでは、もっとも広く深く通じている優れた理論的心理学者である、として知られている人だからである。

この文章から、そして、***Psychology in Human Context***の全巻から、私にひしひしと伝わってくるのは、心理学の研究と教育にその一生をささげたKochの心理学に対する愛着とともに、それへの鋭い批判、そして、それに対する幻滅と絶望の深さである。ことに、心理学の学問としての統合性への希求の激しい強さにもかかわらず、その達成への希望が崩れ去って行ったことへの悲哀である。少なくとも、一読者としての私には、そのように感じられる。このことは、しかし、暗くではなく、明るく捉えることもできるかもしれな

い。つまり、心理学の多様性の統合化の課題は巨大であり深遠であって、安易で浅薄な小手先の研究で解決できるような性格のものではない。むしろ、比喩的に言えば、心理学の将来は、無限とも言うべき広大な未開拓の荒野が、我々による開拓を待っている状況にあり、「心理学」という確立した学問が既に成立していて、ただそれを学べばそれで済むというような安易な状況ではない。したがって、偶然に出会った特定の心理学の特定の変種を修得することで、心理学の研究と教育と実践のための学習を修了できるなどと考えるべきでは全くない。眼前には、将来に向かって開拓すべき荒野が地平線の彼方まで広がっているではないか。さらに、その開拓を少しでも始めてみると、さらにさらに、新たな地平が次第に開けてきて、さらなる開拓への努力を誘って止むことがない。この状況を、絶望に彩られた暗闇に閉じ込められた状況として悲観的に捉えて立ち竦み立ち止まるか、あるいは、希望に満ちた日の出が旅への出発を誘っている状況として楽観的に捉えて力強い旅立ちを始めるか。その選択は、もっぱら、この状況に生きる各人の＜私と世界＞の体験に、それぞれの生き方そのものに、委ねられている、と。

「多種多様な諸理論をまず概観し、ついで、一理論に熱中し傾倒し、ついで、それを厳しく批判的に検討せよ」：Hall & Lindzey

とはいえ、思えば、上述のKochの嘆いた状況を、私が初めて知ったのは、実は、最近のことというわけでは決してない。あれは1961年のことだった。東京大学大学院人文研究科で、G.W.Allportを専門としておられた私の恩師・依田新（よだ　あらた）教授が開講されていたHall & Lindzey（1957）***Theories of Personality***の購読ゼミおいてであった。私は、その最終章のまとめの報告を担当していた。最終章（同書538－558）は、全巻12章に渡って展開されてきた、フロイト、ユング、に始まり、因子理論、S-R理論、ロジャースの自己理論、マーフィーの生物社会的理論で閉じる諸理論の概観を背景に、＜Personality Theory in Perspective＞と題されている。本書が＜Theories＞と題されていることからしても、直接的には人格理論の、間接的には心理学理論の、多種多様性は自明の前提である。では、その＜多種多様性＞に対して、どのように対処することを、Hall&Lindzeyは、推奨していただろうか。47年の時を隔てて、鉛筆による細字の書き込みへの懐かしさに胸うち震わせる思いで、いま読み返してみる。

最終章に"Theoretical Synthesis versus Theoretical Multiplicity"と題する一節がある。人格心理学諸理論の「多様性と不一致」が際立つことを指摘して、こんなにも多様で葛藤する諸見解が一つの経験的領域にあることは望ましくないのではないか、との問いを提起しているのである。そして、それぞれの理論の強み（"strengths"）を結合して、「一個の独特に強力な理論」（"a uniquely powerful theory"）を創造できないものか、と問うている。が、この統一理論を希求する考えを提起した後で、Hall&Lindzeyは、こうした考え方は、興味をそそるし、現代心理学者たちから多くの支持を受けているもいるが、しかし、深刻な反対意見も提起されうるとして、以下のような反対意見の根拠を挙げる（同前書、555）。第一に、既存の諸理論の形式的明瞭性が不足しており、相互の共通点と差異点を同定することが困難であること。第二に、諸理論の間には、そもそも解決不能な対立が在ること。第三に、すべての理論が経験的な有用性を持つわけではないこと。第四に、理論的な調和と一致が現在において最も健康な状態である、との前提は成り立たないこと。単一の理論を求めて時間と労力を注ぐことよりも、多種多様な諸理論を同時に活用して領域を自発に探索するほうが賢明であること。そこで、理論の発展は、個人的な好みや信念による人工的な過程に委ねるよりも、自然に任せるのがよいのだ、と論じている。

さらに、心理学を学ぶ学生に、矛盾する諸々の考えの混乱を示すよりも、単一の組織された見解を示すほうが、教育学的価値があるのではないか、という問いに対しては、それは、学生にとって精神衛生的（mental hygiene）には良いかも知れないが、その分野で真剣に仕事をするための準備としては、望ましいことではないと断言する。「学生は偽りの調和感覚をなぜ与えられるべきなのか？その分野が現実に存在するがままに、学生に見せるべし」（"Why should the student be given a false sense of harmony? Let him see the field as it really exists."）としているのである。さて、それに続く次の論点が重要である。

それは、一般的総合あるいは統合の考えが学習者たちに伝えるのは、注意深くあること、総ての論点を考

慮に入れるべきこと、そして、特定の一面的な立場に情動的に巻き込まれることを避けること、などの必要である。だから、何であれ特定の理論を抱きしめるまえに、まず、その理論を他の諸理論と比較し、総ての点において、その理論が他の理論と比べても同じくらい優れていることを確かめ、その理論について、批判者たちがこれまで何を言ってきているかを、読もうではないか、という立場、これが一方にある。しかし、この立場に対して、Hall&Lindzeyらは、次のことを、学生たちに強く推している。すなわち、「学徒（students）たるもの、人格諸理論としてどのようなものが今あるかを、一旦、概観した後では、ある一つの特定の理論的立場を、留保なしに、狭量な愛情をもって受容せよ。その理論を批判的に検討することを始める前に、その理論に熱狂的に心酔せよ」（同前書、556）と。理論というものは、冷静に、冷ややかに、批判と留保を以って理論に近づく人に対しては、それに身も心も捧げている人に対してと同じようには、多くのことを教えることも為すこともないものだ、というのである。だから、学生は、自分の批判的能力と詳細な学術的道具立ては留保しておくのがよい。そして、実際に自ら研究に携わってみれば、その理論の適切性に落胆したり絶望したりする機会はいくらでもあることになるだろう。そして、ついには、その有用性の欠如を確信するに至るかもしれない、と。さらに、少なくとも、そのような経験を経ることで、その理論が「彼に対して何をしてくれることができるか」を発見する機会を持ったことになるだろう、と述べる。そこで、彼らは、学徒に向かって、次のような提案をしている。まず、原文を引用する。"Our general proposal to the student is that he first acquaint himself broadly with the field of personality, and this is precisely what this volume is intended to do. Then let him immerse himself in one theory of personality. Wallow in it, absorb it, learn it thoroughly, and think that it is the best possible way to conceive of behavior. Only reserve in one small corner of his mind the reservation that the final crucible for any theory is the world of reality studied under controlled conditions. After the romance is over and the student is seduced by the theory, he may set about the cold hard business of investigation to find out whether his theoretical marriage will withstand the ravages of reality."（557）．粗い邦訳を試みる。

「学生に対する我々の一般的な提案は、まず、人格の分野に広く馴染むことである。そして、それこそが、この巻（***Theories of Personality***）が為さんと目指していることである。それから、一つの人格理論に熱中し没頭するのがよい。それに溺れ、それを吸収し、それを徹底的に学び、その理論こそが行動を考えるに可能な最善のものである、と考えるがよい。ただ、心の小さな片隅には、如何なる理論にとっても、最終的な厳しい試練は、統制された諸条件のいもとで研究された現実世界であるのだ、という留保を保留しておくのがよい。さて、ロマンスが終わり、学生がその理論によって誘惑された後には、彼は次のことを見出す困難な探究の仕事を始めてもよい。すなわち、彼のその理論との結婚は果たして現実の諸々の破壊に耐えるであろうかどうかを見出す仕事に。」

「既存の諸理論の合併融合（amalgamation）」に、心理学の進歩への期待を賭けることは出来ぬ、とも書いている。また、理論の定式化は、「自由企業」であって、他人にどうこうせよと命令する権利を持つ理論家は誰もいないのだ、との言葉（553）も、私には印象的であった。

要約すれば、彼らは、学生に、「多種多様な**諸理論をまず概観し、ついで、一理論に耽溺し熱中し傾倒し、ついで、それを厳しく批判的に検討せよ**」と勧めていることになる。ことは、「一理論に熱中し傾倒する」ことを経ることなしに、最初から冷ややかな批判を通して統合的理論を求めることを、強く戒めている、とも言えるであろう。

Hall & Lindzeyの論述と主張は、心理学全般についてではなくて、あくまでも心理学におけるPersonality Theoriesの状況についてのものである。しかし、Personality Theoriesの小世界の状況は、上記の信頼すべきS.Kochの指摘にあるように、心理学の世界全体においても、さらには、殊に臨床心理学の世界の状況も、同様の状況として見られると言ってよい、と私には思われる。その意味では、私の1961年の状況と、恐らく、2008年の状況とは、心理学の小世界においても、全体世界においても、その「凝集性」（cohesiveness）あるいは統合性（integrity /unity）の欠落あるいは欠如に関しては、依然として、同様の＜混沌＞の状況にある、と言ってよい、と私は考える。そもそも、"A theory"が一方に在り、他方に"Theories"が在るが、"The theory"として心理学に関わる人間の

全員が認めるようなものは存在しない、というのが、霜山が指摘し、S.Kochが指摘し、Hall & Lindzeyが描写していた心理学世界の状況である、と言えよう。このことは、Personality Theoriesの小世界以外の諸々の小世界でも同様であることは、Theories of Learning, Theories of Perception, Theories of Development,…などなどの書名を想起すれば、多言を要しないであろう。

さて、あれから、既に45年余が経っている。50年近くの年月を経て、その状況に根本的な改善が見られないとするならば、将来、この状況を積極的に改める強力な運動が奇跡的に起りでもしない限り、今後とも、状況に大きな変化を期待することはできない、という見通し感が生まれてくるのも、無理からぬことであろう。言いかえれば、これまで提起した<混沌>をどう生き、それにどう対処するか、という問題は、かつての問題で今は解決済みという性格の問題ではなく、現在においても、そして、恐らく、今後とも、心理学関係者を悩ませ続ける問題である、ということである。

想像自由変更の試み：霜山徳爾、Sigmund Koch, Hall&Lindzeyの所説を典型事例として

ここで、(X) 霜山、(Y) Koch、そして (Z) Hall & Lindzey、と、心理学の多種多様性への対処について、それぞれの所説を見てきたのだが、この問題に多少とも触れている心理学者を探索すれば、もちろん、これまた、無数の多種多様な見解を見出すことができるであろう。それ自体、切りのない「動物園」である。ここでの私の願いは、これら三つの所説をそれぞれに優れた典型的事例として、現象学で言うところの「想像自由変更」によって、<多種多様な心理学の多種多様性への対処>の多種多様性を自由に想像し、可能性を探究して、その先に見えてくる意味と構造を解明することである。それは、たとえば、これら三者の所説の共通点を探り、対処の在り方を見出そうというのでは、必ずしも、ない。三者の所説から、多種多様性の意味と構造を洞察して、<対処>の在り方の多種多様性を想像し、その多種多様性への対処の不変性を求めたい、というのが、その願いである。

言いかえれば、三者が現状として共通に認めている<心理学の多種多様性>に直面して、人生の限られた時間を考えるとき、一人の個人にとって可能な<生き方>と<対処>の仕方は何か、その多種多様性は何処から生じるか、そして、<心理学の多種多様性>と<生き方と対処の仕方の多種多様性>を調和させる全体像あるいは世界像の可能性として、何が考えられるか、を考えたいのである。「想像自由変更」は、その可能性の探究である。

諸科学あるいは諸学問の世界における<混沌>と<秩序>：一素人による瞥見

ところで、では、そのような、心理学においてそこ<多種多様性>がそのままに放置されているとも見える<混沌>の支配という事態は、果たして、現代心理学に例外的かつ個別的に特有のものなのであろうか。あるいは、他の諸学問においても広く見られる普遍的なものなのであろうか。心理学という小宇宙についてさえ、その全体像を掴むのは容易ではないのに、世界の諸学の状況の全体像を掴むことなど、不可能とも思われる。しかし、幼児でも、晴れた星空を見上げて、銀河の流れを一瞥することは不可能ではない。<多種多様性>が普遍的であるか否かを直観すること自体は、必ずしも不可能事ではないように、私は思う。そこで、幼児ではないが、素人の一人としての、素朴な観察を以下に述べる。

たとえば、数学では、そのようなことはないのではないだろうか。つまり、A派の数学で認められることが、B派では数学としては認められないというようなことは、考えられないのではないか。現代数学は、ユークリッド幾何学も非ユークリッド幾何学も共に包含して、数学全体の秩序を形成しているものと、推測される。いつか、数学者に尋ねてみたい。

また、物理学とて、恐らく、一見、数学と同様であろうとも思われる。しかし、心理学の「見えないもの」(invisible) としての「心」と同様に、「見えないもの」としての素粒子に関しては、物理学者の間の論争もあり、相互に根本的に異なる存在論と認識論に立つ、一方に論理実証主義的現象論の研究と、他方に素粒子の実在を唱える弁証法的唯物論の研究とが対立して存在していることを紹介し論じている坂田昌一教授の論文を、雑誌『唯物論研究』で、1960年代に興奮して読んだ確かな覚えがある。それは、あたかも、心理学における論理実証主義的な行動主義と弁証法的唯物論心理学との間の対比を連想させるものであった。あるいは、ニュートン光学とゲーテ光学の古典的な対比もま

た想起されよう。

「見えないもの」に関しては、見解が分かれる傾向が生まれる可能生が大きいのである。ちなみに、心理学こそは、「見えないもの」としての「こころ」を主題にする学問であってみれば、存在論および認識論に関して、見解が分かれる可能性は極めて大きい性格をもつ学問である、と言えるであろう。

さて、自然科学から社会科学あるいは人間科学に視線を転ずると、たとえば、経済学では、かつては、マルクス経済学が一方にあり、近代経済学が他方にあって、少なくとも、心理学におけるのと同様に、そこには＜混沌＞があった。そこで、かつては、初学者には大きな選択の余地があったらしい。たとえば、ある大学の経済学部が、近代経済学とマルクス経済学に大きく二分されて両者ともに栄えていた時代あった。が、ソビエト崩壊の後には、少なくとも日本の経済学の世界では、マルクス経済学は急速に衰退したと伝えられている。今日では、聞くところでは、その衰退はまさに目を覆うばかりという。私は、心理学における、行動主義勃興後の内観主義心理学の衰退を想起させられている。

また、歴史学については、渡辺二郎は、その著書『歴史の哲学』において、歴史の大きな流れの中では、＜超越的歴史観＞の崩壊から、＜内在的歴史観＞の克服を経て、＜実存的歴史観＞こそが、「世界のうちに実存する自己の存在という原点に立脚しながら、真にあるべき歴史への認識的かつ行為的関わりの根本地点を樹立したものとして、今日誰もがそこへと立ち帰って、歴史の問題を熟考すべき、最も大切な歴史の見方の根本をなすものである」（渡辺二郎、1999, 9）としている。そこには、心理学において容易には見出すことのできない統一的で全体的な展望が提示されている、と私には思われる。

また、社会学では、「行為の一般理論」と社会体系の「構造・機能的分析」のT.パーソンズと「生活世界の構造」の現象学的社会学者A.シュッツの間の往復文書が想起される。それは、渡邉の＜超越的歴史観＞と＜実存的歴史観＞の間の対比を思わせ、また、一般システム論と、現象学における形式的存在論（Formal Ontology）との間の対比をも思わせるものであった。言いかえれば、安永浩が、その著『精神の幾何学』において随筆的に描いた、＜神＞の（B）の超越的立場と＜蟻＞の（A）の実存的立場の対比を思わせる。安永の（A／B）の（A）と（B）を共に必要と考え、共に尊重する立場からすれば、社会学におけるパーソンズの立場とシュッツの立場の両者は、一方が他方を絶滅しなければならないような敵対的関係ではなくて、相互に支えあい補い合うような相補的関係にあることが見えてくるように、今の私には思われる。

また、そうしたことを論じる場であるとも思われる哲学そのものにおいてはどうかと言えば、分析哲学、論理実証主義、言語哲学、プラグマティズム、弁証法的唯物論、現象学、実存主義、などなどの並立と乱立、時には深刻な対立は、周知の通りである。それを、素人が期待するような、一つの統合的哲学に統一されることなど、いつ実現するとも知れぬ、期待することも愚かな遠い夢に過ぎないであろう。しかも、それぞれにおいて、さらに、多種多様な専門化と分化が起こっていることを思えば、その＜混沌＞は、心理学における以上でさえあるのかもしれない。「哲学」と言えば一つの学問かと思い込んでいた、無知だった若い日を思い出す。K.Jaspersのドイツ語テキストの購読ゼミで、碩学・桂寿一先生に、B.Russel卿の「西洋哲学史」を読もうとしているとお話しすると、先生が戸惑いの表情を浮かべられたことを思い出したのである。しかしまた、ふと、ウイーン学派のR.CarnapやO.Neurathらの「統一科学」運動のことも、思い出されてくる。物理学主義による「プロトコル命題」の組織化と体系化によって、統一科学を創造しようとした運動である。この運動の存在自体が、諸科学間はもちろん、諸科学内においても、広くみられる＜混沌＞が当然視されていることを示唆している。この運動は、＜混沌＞に＜秩序＞を齎そうとした運動である、と理解される。＜秩序＞を齎す方法そのものにもまた多種多様性が生まれ、そこから、多種多様な立場による＜混沌＞が生じる。

このようにして、素人的な瞥見を多少とも試みてみるならば、そこからは、（Y）のKochが嘆いた心理学における＜混沌＞は、諸学問の中でも決して例外的な事態ではないということが、まず直ちに見えてくるように思われる。敢えて心理学的に解釈して言えば、人間とその集団の多種多様性に対応して、学問研究においても学派の多種多様性の発生は避けがたいものである、ということになりそうに思える。そして、学問においては、＜混沌＞は原理的に否定されなければならないものとばかりは言えないのではないか、という疑

念も湧いてくる。むしろ、学問の隆盛のために＜混沌＞は、美しい蓮華の花を咲かせるべき＜肥沃で豊饒な沼澤＞として奨励すべきである、という楽観的見方さえも成立しうるのではないか、と思われてくる。

心理学世界における＜統合＞あるいは＜統一＞への幾つかの動きの思い出

心理学の多種多様性を肯定し、「自由競争市場」の民主主義として賞賛し、放置し混乱の度を増して行くのを放置するのも一つの歴史的、社会的、文化的対応であろう。しかし、思い起こしてみると、そうした多種多様な心理学の世界になんとか＜秩序＞を与え、＜統合＞（Integration）や＜統一＞（Unity）を目指そうとする動きも、私が記憶するだけでも、その個別的な事例への好悪やその適否などはさて措くとして、幾つもあったように思い出されてくる。ここに、覚書的に、メモ的に、記してみよう。

第一に思い起こされて来るのは、政治的な力による＜統一＞への動きである。たとえば、戦前戦後のソビエトの心理学においては、一方では、欧米の心理学を「ブルジョア心理学」とか「観念論心理学」と蔑称して、否定する傾向があった。そして、さらに、その裏側として、他方では、弁証法唯物論心理学のみを、「科学的心理学」として称揚し、一党支配政党であったソビエト共産党の中央委員会による公認公許の心理学として唯一の「正しい」心理学として、国家として認めていた、と伝え聞いている。たとえば、それまでの米国由来の心理テストを重視していた「児童学」への党中央委員会による「児童学批判」の記憶は生々しい。その詳細は、『ソビエト教育学の展開』（矢川徳光著）に詳しかった。私の尊敬する心理学者S.L.ルビンシュテインは、「児童学批判」によって、一時、研究者としての職を奪われ、中学校の論理学の教師を勤めていたことがあった、と聞かされて驚いた覚えがある。さらに、その名著『一般心理学の基礎』も、出版後しばらくして、その西欧の観念論心理学の影響下から脱していないとの「政治的」な批判に曝されることになった、という。ルビンシュテインは、当時、既に大家であったにもかかわらず、その批判に応えて、唯物論的立場から推奨されていた高次神経活動の生理学を集中して研究し、その著『存在と意識』（1960/61）における高次神経活動生理学の重視へと歩みを進めて行ったことも、想起されてくる。しかし、そのような政治的圧力下にあっての、いわば学術研究および言論の不自由な状況下における学問研究活動は、決して望ましいものでない、と現在の私は確信している。その学問活動を行う本人の「心の奥底からの納得」に基づいて、つまり、本人の「明証」に基づいて、研究を行うことが保障されなくなる恐れが生じるからである。有名な、教会による審判の直後に低く呟いたと伝えられるガリレオ・ガリレイの一言、「それでも地球は動く」を想起したい。ちなみに、晩年のルビンシュテインは、その肖像写真の一枚を見ると、眉間には深い二本の皺が刻まれていて、決して幸せな表情を浮かべているとは言えないように、私には感じられる。また、『存在と意識』の中での、ルビンシュテインによる、フッサール、ハイデガー、らに対する批判には、それを「読んで見よ」という秘かなメッセージが込められていたのではないか、と今の私には思われてくるのである。その表情には、屈折した思いが流露しているように、私には感じ取られるのである。しかし、ルビンシュテインを初めて学び始めた頃の若かった私は、例えばルビンシュテインの現象学に対する批判の文章を読んで、彼が批判する「誤った観念論哲学」としてのフッサール、ハイデガー、メルロポンティ、サルトルらの現象学を、自らの生涯においては時間をかけて学ぶという無駄をしなくて済む、と考えて、何か人生の貴重な時間をルビンシュテインから贈ってもらったような喜びを抱いたことがあった。今思えば如何にも「愚かな思い込み」であった。後年、神谷美恵子先生のご著書のお導きにより、現象学的精神病理学に近づき、現象学の勉学を経て、現象学的心理学に辿り着くことになった。その現在の私自身の観点からすれば、ルビンシュテインも、ソビエト政治体制の下で、公言は差し控えていたとは言え、フッサールとハイデガーなどの現象学に、多くを学んでいたのであろう、と推測することができる。詳細は割愛するほかないが、たとえば、「私と世界」という主題を取り上げている最晩年の著作を見ると、この推測は、当たらずとも遠からずではないか、と私は秘かに考える。あれは1980年代のことだった。ルビンシュテインの高弟ショローホヴァ女史が来日され歓迎パーテーが開かれたことがあった。その時、東京・お茶の水のガーデンパレスのロビーで伺ったお話によると、その師の晩年は、研究所内でも一人自らの研究室に閉じこもる孤独な研究生

活であった、ということであった。人間は、自らの信じるところを歓迎してはくれない社会の中で、自らの納得によって生きていくことの大切さと同時にその難しさと厳しさを、痛切に感じるのである。

1960年代の初め、ソビエト共産党中央委員会による無署名論文「遅れを取り戻せ」と訴える論文が権威ある『心理学の諸問題』誌上に、発表されたことがあった。欧米における情報理論、サイバネティックス、システム論の心理学への急激な導入による「目覚ましい進歩」に瞠目し、ソビエト心理学研究者の怠慢を指摘し、覚醒を促したもの、と当時評されていたことが思い起こされる。私には、研究者同士の間の開かれた活発な討論によるのではなくて、支配政党による政治的な力によって、学問研究の方向を、しかも、統一的方向を、指示されるらしいことに、その内容の当否とは別に、強い違和感を覚えたものだった。

ここで、ウエモフの論文（1952）を読んだ当時の新鮮な思いを想起する。ウエモフは、「諸科学の三つのグループ」という科学の分類を提示して、(1)「諸対象を、その諸性質のあらゆる多様性において研究する科学」。たとえば、「地球の表面についてのすべてを知ろうとする地理学」。(2)「一定の諸対象における諸性質と諸関係の一定の複合を研究する諸科学」。たとえば、科学の大多数。「物理学、化学、生物学、…」。そして、「新しい科学」として、(3)「個々の性質や関係を、その担い手の特殊性をまったく捨象して、研究する科学」。たとえば、「サイバネティックス、情報理論、一般システム論」。という諸科学（1)、(2)、(3）の間の区別を提示し、新しい「科学の分類」を提唱していたのである。これら「新しい科学」は、「システム」とか「構造」とかを中心とする「類似化」による学問である。これは、「モデル論」にも「構造主義」にもつながっている。心理学に諸科学の間における位置に強い関心を抱いていたJ.Piagetの心理学と親和性をもっていた。しかし、そうした「新しい科学」と心理学との親和性の慎重な検討もなしに、突如、それまで声高に蔑視していた西欧心理学、ことに米国心理学の跡を追い、それに追いつけそれを追い越せ、と急き立てる、朝令暮改とも恣意的とも思われる「政治臭」は、学問の真正の進歩には馴染まないものではないか、と当時の素朴な私の目にも映ったものだった。この問題は、システム論と、フッサールの形式的存在論の構造的類比の問題にも繋がっている。思えば、私が、あるご縁で、システム・エンジニアーたちの生きている世界についての現象学的心理学的研究の小さな試みを行ったのは、この問題に触れていたのであった（吉田章宏、2000）。私は、その研究によって、研究の楽しみを味わったし、また、ある確信を掴んだ。しかし、仮に、支配政党による命令によって、あの研究を強制されて行わなければならないという状況下にあったとしたら、そのような楽しみと確信を私は、果たして、抱くことができたであろうか。納得も確信も抱けない場合でも、納得した様子を示し、確信を抱いたかのように発言しなければならないという、人間の自由な「確信形成」を政治的に強制する「政治体制」は、学問の発展には、否定的にしか働かないのではないだろうか。ガリレオの「それでも地球は動く」は、やはり、永遠にその残響を人々の心に響かせて行くであろう。

しかし、独裁国家の体制の下では、そうした学問研究に対する「政治的強制」は、むしろ、通例のことのようである。ナチスドイツの学問がそうだった。教育学には、その傾向が顕著だった。また、ドイツ民族の優秀性を説く「人種理論」（Rassen Theorieなど）も想起される。ルイセンコ学説もどうもそうだったらしい。そう言えば、日本でも、戦争中は、世界に冠たる日本民族の優秀性が、到る所で、声高に説かれていた。とりわけ、文部省による国定教科書の『国史』では、「神代」から日本の歴史が説き起こされていたことは、未だに、私の生きた記憶に鮮やかである。そして、戦前の日本の<学問の自由>は強力な政治的統制下に置かれていたことも、周知の通りである。「学問の自由」はいつ崩れるとも知れない脆弱な現実なのである。

もっとも、では、「民主主義」と「市場原理」の国、米国において、そのようなことが全く無いかと言えば、それもそうでも無いらしい。少数派の心理学（たとえば、多数派である行動主義的心理学に抵抗する、少数派としての現象学的心理学）は、旧ソビエトのように「支配政党」によるものではないとは言え、学界を支配するAPA（アメリカ心理学会）によって強い圧迫を受けていた事実があるという。それは、特定の心理学を主軸に据えようとする私立大学大学院の創設やその存続をめぐって、在来の心理学の「科学観」に基づく学会の権威により、圧迫やら排除の論理が押し付けられてくる、という。この点については、私の親

友A.Giorgiが、来日の際に、その比較的詳しい報告をしており、私がそれをまとめて公刊しておいた（ジオルジ、1990）。さらには、David Smith（1983）にも、前述のDuquesne U.のPh.D. Programの内容構成に関連して、大学独自の現象学重視に傾斜した、いわば「牧場」構築への方針と、あくまで「動物園」であることを強く求め、実証主義的な特定科目（たとえば、推測統計学など）の開講をPh.D.プログラムの学会による認定（accreditation）の必須条件とするAPAの指導方針との間で、切なくも揺れ動く一私立大学の立場でスタッフが一喜一憂する様子が、描かれている。私がDuquesne大学滞在中にも、何人かの人々から、この話は繰り返し聞いている。これも、学会の「政治的圧力」によって、全国<統一>に向けて動かそうとするものと理解することもできる。

日本においても、臨床心理学の世界で、臨床心理学の修士課程を資格取得のためのプログラムとして認定を受けるためには、大学院の心理学コースは、認定協会の認定を受けなくてはならならず、そのためには、協会の指定する開講科目を準備しなくてはならない、と聞く。それは、「動物園であることを」あるいは求めているのであろうか、あるいは、「牧場であること」は許容しないことを意味するのであろうか？心理学の潮流が何によって動かされて行くのかについて、考えさせられる状況がここにはある。さらには、日本においては、文部科学省による大学における学科新設に関する認定が必須であり、その認定には、「牧場」であることは、許容されていないのであろう。何らかの、外部的制約条件が政治的に課せられて、学問の自由な「市場原理」に基づく発展は、善かれ悪しかれ、許容されず、阻害される。このことは、学問の在り方に、学問そのものの内在的論理ではなく、外在的論理によって、制約が加えられていることを意味する。それは、これまた、善かれ悪しかれ、つまり逆説的に、<混沌>から<秩序>への動きを学問の外部から促す、皮肉な状況がある。「人間とは政治的動物である」という言葉が、ふと脳裡をよぎる。

さらに、小さな規模の、しかし、重要で見過ごすことのできない力として、心理学教育における指導者である教育者が、たとえば指導に当たる教授が、被指導者である学生や大学院生に及ぼす力の問題がある。1980年代に読んだ、*Journal of Phenomenological Psychology*中の論文に、大学院生が、自らの博士論文の研究題目と研究方法をどのようにして選び決めるか、その経験について博士論文執筆者たちに面接して、その記録により行った、大学院生の研究経験についての現象学的心理学研究があった。印象深いのは、米国でさえ、大学院生は指導教授の意向に従うということだった。心理学の世界でも、指導教授が大学院生に及ぼす「力」は絶大なのである。考えてみれば当然ともいえる。研究の初心者である大学院生は、広い心理学の世界に無知であるがゆえに、学識経験のある指導者の指導に半ば盲目的に従わなくてはならないことになるからである。そのことが、霜山徳爾先生が“passing identity”と呼んだ理由でもあろう。大学院生が、自らの自主的な判断で究極的に選んだものとは、必ずしも、言えないからである。偶然の出会いによるとしか言いようが無い側面が確かにあるからである。また、そのことが、「とにかくianのつくものに早々になるな」との、また、「本当にその人の器量に向いているものは、長い間の真摯な模索の果に、いわば向こうからきてくれるものである。したがって自分でやたらに焦慮して主観的にはからうのは禁忌である。」という忠告を生むのであろう。さらにまた、前述の霜山教室のように、教室員が多種多様な在り方をするに任せることは、いわば「政治的な力」に屈伏してではなく、各人が自らの「器量」に基づいて、各人が運命的に出会うことを大切にしたいという深い願いからこそ、生まれた在り方なのであろう。しかし、そのような心理学教室は、現実には実現されることは世界的に見ても極めて稀であり、しかも、その実現には、指導者の並々ならぬ該博な学問的実力と教育的で人間的な包容力の大きさが必須とされるであろうことは、敢えて、改めて指摘するまでもないであろう。

ともあれ、その好悪は全く別にして、<混沌>から<秩序>への力は、これまた大小さまざま、そして、多種多様であれ、現実に働いているのである。そうした力が働いていないとは決して言えないのである。

ここで、私見を述べるならば、心理学という学問の<教育と研究>の水準を維持するという目的と、<混沌>から<秩序>への力を駆使するという目的との二つを考えるならば、少なくとも前者と後者は、一旦は、峻別されなければならない。そして、外在的な政治的権力によって、後者の目的を達成しようとすることは、学問の健全な発展を妨げる、というのが現在の私の考えである。その理由は、学問の発展は、学問

内部の自生的な論理によって、つまり、理論家、実践家、研究者、教育者、学習者それぞれの「心からの納得」によって、言いかえれば、各人がそれぞれの確信する「明証性」をそれぞれに最大限に尊重して、各人の責任において、進められるべきものである、と私は信じるからである。また、それを貫く個人によって、新しい発見は生み出されて行くのである。そうでないからこそ、時代による「流行」が変われば、人々が一斉に一つの流れに乗り換えて行く、というようなことが、繰り返し繰り返し起こるのだ、と私は信じている。しかし、この点については、前掲の、S.Kochの“rational suasion”（理性的／合理的な[合理的理性に訴える]説得）によって、心理学の再組織化が行われうるとするのは「幻想」である、という趣旨の言葉や、後に言及するE.Gendlinの“Proposal for an international group for a first person science”と題する論文の中の言葉からも、長年にわたり心理学世界を取り囲む社会的現実の苦々しい厳しさを生き抜いてきた優れた先達たちの、社会的な現実に関する、認識と洞察に学ばなければならないであろうことも、私は、否定できないでいる。しかしまた、それを甚だ苦々しく残念なことであるとも感じている。そこで、さらに、別の可能性を考察することへと、私は促されることになる。

＜混沌＞の同一と差異：心理臨床（臨床心理学）における、と心理学一般における、の間

ここで、心理学という学問の＜混沌＞、それとともに＜秩序＞、が持つ意味、ことに、「心理臨床（臨床心理学）」と「心理学一般」、ことに、「客観的科学的心理学」、とにおける、その意味の同一と差異について考察したい。ことに、心理学の理論家／実践家、研究者／実践者、教育者／学習者などの、それぞれの視点からの、＜混沌＞と＜秩序＞の意味を考えることを試みてみたい。

まず、先に挙げた、霜山（X）とKoch（Y）とHall&Lindzey（Z）の言葉を、再び取り上げよう。すると、次のことが注目される。すなわち、これら三者が、ともに、多種多様な心理学の併存・乱立による＜混沌＞（無秩序）が現状であることを認めることにおいては、共通している、ということである。しかし、学生・院生たちがそれにどう対処するか、その仕方について三者が勧める在り方は、また、三者が学生・院生たちに注ぐ眼差しの在り方は、それぞれに異なる印象を私に抱かせる、ということである。

再度の引用となるが、霜山は、(X)「心理療法にはおしきせは存在しないのである。各人はおのれの器量に合わせて労苦を重ね、…『各人は各人の心理療法を持つ』（"Jeder hat seine Psychotherapie."）ことが重要なのである。それには長い道程が必要である。臨床を中心とした教室ではあるが、私は教室員に自由に何でも好きなことをさせている。…まことににぎやかで、教室の色彩が統一されていないとよく批判される。しかし私はそれらを単なるpassing identity[引用者注：一時的な（自己）同一性]として黙って暖かく見守っている。…」（霜山徳爾、1989、150）と書いていた。

これに対して、Kochは、(Y)「最低限でも、（心理学の）学生たちは、或るジグソウパズルの断片をつなぎ合わせ纏め上げるのが彼ら自身の責任であるなどと信じることを促されるべきでははい。そのパズルたるや、彼らの教授たちがとっくの昔に解くことを放棄してしまったパズルなのだから。そして、そのパズルは、原理的に解決不能であり、その断片を纏め上げようと試みる度に、ますます解決が難しくなるという奇妙な特質をもつパズルなのであるから。」（Koch,S. 1999,134－135）と書いていた。

これに対して、Hall&Lindzey（Z）は、上述のように、約言すれば、「**多種多様な諸理論をまず概観し、ついで、一理論に熱中し傾倒し、ついで、それを厳しく批判的に検討せよ**」という趣旨の忠告を記していた。

そこでまず、私の印象批評を試みる。(X)には、ある「厳しさ」を私は感じる。それは、心理療法において、それが先輩指導者であれ教授であれ、学習者は、他者に与えられた特定の種類の心理療法を、他者に与えられるがままに盲目的に受け入れて自らの心理療法とすることは決してできないことが、あるいは、そのようなことは許されないということが、明言されているからである。「各人はおのれの器量に合わせて労苦を重ね」とあって、各人のそれぞれの「器量に合わせて」と、「器量」と実践の歴史の流れに沿ったそれぞれの対処の在り方が問われていることが、さらに各人の責任の重さを告げる「厳しさ」を私に感じさせる。しかも、その歴史は、「労苦を重ね」る「長い道程」であり、それが「必要」なのである。言いかえれば、

心理療法の世界に入った当初、仮にある偶然から、特定の流派の心理療法を「恣意的」に選んだとしても、その後の「長い道程」において「労苦を重ね」ることにより、『各人は各人の心理療法を持つ』("Jeder hat seine Psychotherapie.") ことが、期待されているのである。しかし、その「厳しさ」の雰囲気の中で、「暖かさ」と「自由さ」を私は感じる。それは、「私は教室員に自由に何でも好きなことをさせている。」とあり、現在の時点では、決して、「おしきせ」も「おしつけ」もせずに、「自由に何でも好きなことを」させるとしているからであろう。そこには、息苦しさを感じさせる雰囲気はない。「にぎやか」で、「色彩が統一されていない」多彩で、色鮮やかな華やかな雰囲気さえ感じさせられる。では、先の「厳しさ」とこの「暖かさ」と「自由さ」は、(X) において、どう相互に矛盾せず両立しているのだろうか。それは、「黙って暖かく見守っている」ことを支える「それらを単なるpassing identity[引用者注：一時的な（自己）同一性]として」見るという＜遠くへ届く視線＞と＜広い展望をもつ視野＞とによって、可能となっているのであろう。言いかえれば、これからの「長い道程」を思い、その道程におけるひと時である現在の "passing identity" として認めるからこそ、「自由に何でも好きなことを」している現在の在り方を、何らの皮肉な思いもない澄んだ在り方で、全面的に肯定し、「暖かく見守る」ことが出来ているのである。それは、決して、秘められた怒りや憤り、悲しみや、不満や、皮肉を抑え隠して、耐え忍んで、「黙って」見ているのではない。それは、「そんなことをしているなら、どうなっても、俺はもう知らんぞ」と突き放して、放り出す「厳しさ」や「冷たさ」から、「黙って」見ているのでは、決して無いのである。そして、心理療法、臨床心理学、さらに言えば、心理学の世界の＜混沌＞を、必ずしも否定的に捉えているわけではない、という雰囲気さえも感じさせられることも、加えておきたい。

さて、これに対して、敢えて (X) と対照的に記すならば、(Y) には、ある「甘さ」を私は感じる。それは、「優しさ」とも感じられるが、しかし、それはどうも、本当の「優しさ」とは違うように、私には、感じられてならないのである。そしてさらに言えば、その意味では、ある「冷たさ」さえも、私は感じてしまう。その私の主観的な思いを、同様に、「印象批評」として以下に述べてみよう。「最低限でも、(心理学の) 学生たちは、或るジグソウパズルの断片をつなぎ合わせ纏め上げるのが彼ら自身の責任であるなどと信じることを促されるべきではない。そのパズルたるや、彼らの教授たちがとっくの昔に解くことを放棄してしまったパズルなのだから。そして、そのパズルは、原理的に解決不能であり、その断片を纏め上げようと試みる度に、ますます解決が難しくなるという奇妙な特質をもつパズルなのであるから。」というのが、Kochの言葉であった。

まず、(心理学) の学生たちが直面しているのが「或るジグソウパズルの断片をつなぎ合わせ纏め上げる」という課題である、とKochにより、捉えられていることが注目される。ちなみに、それは、霜山の場合のように、それぞれの学生が自らの "identity" の発見やそれへの到達を実現するという問題として捉えられているのではない。そうではなくて、それは、相互関係の不明な諸々の心理学 (psychological studies) の世界の＜混沌＞を、いわば或るジグソウパズルの断片の乱雑な散乱と見なして、それらのパズルの断片 (psychologies) を寄せ集めてなぎ合わせ一つの絵画にまとめあげるという課題として、提示されているのである。それは、好意的に理解するならば、＜混沌＞の中にある諸々の心理学の統合化という課題である。そして、Kochが望んで止まない, "the Psychology" (「心理学」) という統合的な学問の全体像を構成するという課題である、とKochがしている、と私には理解される。その課題は、Kochによれば、学生たちの心理学教授たちさえもが、解決不能として既に諦めている課題である。ということは、それら先輩学徒である教授たちも、かつては、つまり「とっくの昔」の前には、「解くこと」を試みたあるいは解くことを願ったことがあるのだ。「解くことを放棄してしまった」課題である、とは、そのことを示唆している。そして、さらに、その課題は、Kochの研究の歴史を基盤に提起される優れた洞察によれば、解決に取り組んでみても、その解決がますます困難になるという「奇妙な特質」をもつ課題である。単純化して言えば、ほとんど、解決不能と見なされるような課題なのである。しかも、それは、あくまでも、「パズル」の解決という性格の課題である。ここで、Koch自身も、このパズルを自らが解決できるとは考えていないことが、暗示されている。しかし、学生たちがこのパズルを「纏め上げるのが彼ら自身の責任であるなどと信じることを促され

るべきでははい」という忠告の言葉は、学生に対しては、少なくとも学生としては、このパズルを解くことを自らの責任として信じて深刻に受け止めて憂鬱になることから解放されるようにと、学生の心理学の状況に対する対処の在り方を忠告していることを意味する。が、この言葉は、さらに、それらの学生たちを指導する教授たち、あるいは、心理学の教育的指導者（教育者）たちに対しては、「信じることを促すべきでない」として、暗に、そのように「促す」教授たち、指導者たちが居るとすれば、彼らに対して、明示的に、やや露骨に表現すれば、「その課題の解決は、若い時のあなた自身が出来なかったこと、そして、その後、自らの力で解決することを、とっくの昔に諦めてしまったこと、ではないか。それを、今になって、明示的にではないにせよ、あたかもその解決が学生たちの責任であるかのように押し付けたり、示唆したり、間接的に、解決を試みることを促したりするとしたら、そして、それは学生たちの責任ではないのだよ、と明示的に公言しないとしたら、教授さんたちよ、あなた方、それは、学生たちに対して、無責任というものではないか。」と言っていることになるであろう。

では、この忠告は、学生たちに対する「暖かい」忠告であろうか。無駄なことが確かな努力をあらかじめ避けることを忠告しているという意味では、学生の人生とその将来を思う「暖かい」忠告とも言えるかもしれない。しかし、Kochも、若い時に、望んだに違いない心理学の統合化は、無知で無垢な、希望に燃えた若い世代の学生たちが強く望むとするならば、その希望は正当な希望であり、それを冷ややかに頭から否定して突き放すだけでは、そして、不毛な道に進むことから防いであげたよ、と言うだけでは、「暖かい」忠告とは言えないように、私にはどうも感じられるのである。そのように感じるのは、恐らく、その若い学生たちが、心理学の世界で将来どのように生きていくかについての積極的な示唆が、そこには、何も与えられていない、と感じるからであろうか。学生たちへの希望のメッセージがそこには感じられない、ということでもあろうか。それに、Kochの言葉には、彼自身の心理学の全体状況への失望あるいは幻滅と、その中で生きている心理学者たちに対する、冷ややかで皮肉な眼差しが、私には感じられるから、ということでもある。しかも、繰り返しになるが、***Psychology: A study of a science.***の著者であるKochが、そのような言葉を吐くということに、私は、ある憂鬱さを感じることを禁じ得ないのである。言いかえるならば、比喩的には、心理学を学び始める若い学生たちにとって未知の心理学世界の＜混沌＞を熟知している、いわば世界中を旅してきた経験豊かな旅人Kochが、これから旅に出ようとしている若い旅人に、これから旅する＜混沌＞の世界は＜無秩序＞である、と告げているのである。では、これから、その世界に向けて旅をしようとする旅人に対して、Kochは、その世界の＜秩序＞について、次の世代の心理学者に対して、果たしてどのような希望を伝えていることになるのか、ということを考えさせられるからなのである。

三番目の（Z）については、短く、私の「印象批評」を記す。（Z）は、人格心理学という限定された世界ではあるが、そこにおける＜混沌＞の海の状態を嘆くその気持ちにおいては、（Y）のKochと共通している。が、しかし、その状態において心理学徒がいかに航海すべきについては、むしろ、（X）の霜山とほぼ同じ忠告を若い学徒に向けて行っているものと読める。そこで、私に興味深く想起されるのは、（X）が、学習者がどの立場を選ぶにせよ、その根底には、その個人と選ばれる立場の間に「親和性」があり、また、限定されたその時点における“passing identity”としての意味があるのだとしていたことである。これに対して、人格理論の（Z）であるのに、「親和性」や“passing identity”という視点は見られず、諸理論に「馴染むこと」、一理論に「熱中し没頭する」こと、「溺れ、それを吸収」すること、心の片隅に「留保を保留」すること、「ロマンスが終わり」、「その理論との結婚」の再検討という一連の定型的な＜学び＞の過程として、歩むべき道が整理されて示されていることである。各学習者個人との「親和性」や“passing identity”の問題としては、必ずしも捉えられていないということが、私の注意を惹くのである。言いかえれば、（X）は、比較的短い時間的スパンで、それぞれの個人の現在の生き方を見守る趣がある。その時々の生き方の積み重ねとして、「真の心理臨床家に必要なゼネラリストになること」を求めるが、しかし、それぞれが「自分でやたらに焦慮して主観的にはからうのは禁忌である」として、それぞれの「器量」に委ねるという。選択はあくまで個人の主体的な生き方に委ねるという、霜山教授の教育思想を示してもいる。これに対して、（Z）は、いわば学習心理学的に、それだけでなく発

達心理学的にも、研究者が辿る＜学び＞の行路の筋道を、第三者的に、定型的に思い描いている趣がある。ただし、理論との出会いと結びつきを「結婚」の比喩で表して、その＜出会い＞そのものは、いわば運命的なものであることを、暗示してはいる。しかし、これとても、＜結婚＞について、実存的にではなく、社会学的に語る趣がある。この点では、(X) と (Z) は、興味深い微妙な対比を成している。この点は、直ぐに触れる、＜生きる＞と＜眺める＞の対比の問題に繋がって行く。

(X)、(Y) と (Z) の背景には、もちろん、共通して、A. 空間的あるいは共時的に言えば、心理学の世界の現在における多種多様な諸学派の相互関係の不明なままの乱立あるいは併存という否定できない現実と、B. 時間的あるいは通時的に言えば、心理学という学問の歴史的な発展における多種多様な諸学派の、相互の関連付けを欠いたままに展開する、多岐におよぶ分化と合流という、これまた否定できない現実がある。

心理学の多種多様性に直面する多様な視点：＜理論家／実践家＞と＜教授者／学習者＞の視点

さて、心理学のこの多種多様性の＜混沌＞という現実は、仮に＜理論家／実践家＞と＜教授者／学習者＞の立場を区別してみると、そのそれぞれのいずれにも、それぞれに異なる性格の困難な問題を突き付ける。が、しかし、この＜混沌＞の意味は、それぞれの立場によって、それぞれに異なるであろう。で、甚だ荒っぽいが、それぞれにとっての問題性格の差異を素描的に考えてみよう。

＜理論家／実践家＞の対比　理論家にとっては、＜秩序＞こそが求めるものであろう。既成の＜秩序＞が与えられることを求める理論家にとっては、＜混沌＞それ自体としては未だ不十分な理論化に過ぎず、それゆえ、その分野の理論化の遅滞の状況を意味しよう。が、＜混沌＞を将来の理論化への挑戦として受け止める理論家にとっては、それは、自らを理論化に向けての挑戦へと誘う魅力ある状況とも映るであろう。しかし、他方、実践家にとっては、＜混沌＞は、実践家がそれを実践において目的に応じて自由自在に活かすことができるほどまでには、＜混沌＞を見分けることが出来るなら、＜混沌＞そのものは、むしろ多種多様で豊富な可能性への接近可能性を意味するものとして歓迎され得るであろう。しかし、既成の＜秩序＞を求める実践家が、＜混沌＞にただ幻惑されて立ち往生するだけならば、＜混沌＞は、そのような実践家にとっては、自信をもって確たる実践を行うための大きな障害ともなりうるであろう。＜混沌＞から一筋の＜秩序＞が見えてきた場合、その微かに見えてきた＜秩序＞にしがみつき安定を求めるような偏狭な実践家として生きるのか、あるいは、その＜秩序＞による一時的な安定を超えて、さらに一層大規模な＜秩序＞を求めて新しい可能性の実践的な探究を続けるような、霜山教授の言う「ゼネラリスト」の実践家として生きるのか。この問いは、理論家にせよ、実践家にせよ、＜混沌＞は、未開拓の開拓へと誘う原野として積極的な意味をもつものとして映るか、あるいは、＜秩序＞を拒絶し接近を頑固に拒む高く聳える障壁としてのみの消極的な意味を持つものとして映るか、が分かれ道となる問いであろう。＜混沌＞そのものが本質的に否定的な意味を持つわけではない。それをどのように受け止めて生きるか、それにどう対処するかによって、＜混沌＞は、否定的にも、肯定的にも、意味をもつものとして映るはずであろう。

＜教授者／学習者＞の対比　学習者が、何の＜秩序＞も示されないまま、いわば準備なしで、＜混沌＞の真っただ中に投げ込まれるならば、全体状況については展望も見通しも持てない無知のまま、もがき苦しむであろう。あるいは、その＜混沌＞を、かえって、享受することも、稀には、あり得るであろうか。さて、そして、学習が進むにつれて、それぞれに、次第に、それぞれなりの＜秩序＞を、自らが生きている＜混沌＞の中に、見出そうとするであろう。一方で、その学習者が、その後、仮に理論家の方向に発達して行く傾向が強まるならば、その＜混沌＞の中に、理論家的な＜秩序＞を見出すべく、＜混沌＞を全体として受け止めるか、あるいは、その特定の部分のみを選びその部分以外の部分を無視するなど、自らの理論化の最適規模を調節しつつ、＜混沌＞に＜秩序＞を見出す生き方と対処の仕方を実現して行くであろう。また、その学習者が、もし実践者の方向に発達していく傾向が強まるならば、実践の中でのその＜混沌＞を生きることを通して、その時々の実践の目的に適合した、＜混沌＞の生き方と対処の仕方を、自由自在に、あるいは折衷的に、取り入れて、実現して行くのであろう。

また、教授者も、統合的な理論を創造する理論家の方向へと生きること目指す教授者であるならば、＜混沌＞に＜秩序＞を齎し、その＜秩序＞の目を通して、学習者の直面する＜混沌＞を見ることを、学習者に教えようとするであろう。その場合は、その教授者自身が、同時に、＜混沌＞の中に＜秩序＞を見出すべき理論家としての役割も果たすことに、結果としてなる。しかし、＜混沌＞を＜混沌＞のままに受容してもなお具体的な実践に生きる実践者の方向を目指す教授者であるならば、彼自身が現実には存在しないと考えるような「偽の＜秩序＞」あるいは「幻の＜秩序＞」を、学習者に教えることは意識的に回避して、仮に全体的な＜混沌＞をそのままに教えることを選ぶかもしれない。いや、＜混沌＞を、そのまま教えないまでも、比較的小規模で学習に最適な選ばれた種類の＜混沌＞を、学習者に、ちょうど教授者自身がそれまで経験してきたような仕方で生きることと対処することを経験するようにと、学習者にモデル的あるいは模擬的な経験の機会を用意することで、実践的教授者としての＜教授＞の仕事を全うしようとすることもあるであろう。

＜混沌＞は、＜秩序＞とともに、それを生きるそれぞれの立場により、たとえば肯定的あるいは否定的な意味を以って現れる。

おおよそ以上のようなことが考えられるのであるが、さらに（X）（Y）（Z）の間の対比には、より核心的な区別が隠されているように、思われてくる。それは、「生きる」と「眺める」の対比に関連する。

「生きる」と「眺める」の同一と差異

（X）（Y）（Z）の、心理学の＜混沌＞への対処について論述を対比的に考えてみると、＜理論家／実践家＞の対比あるいは＜教授者／学習者＞の対比による差異だけを考えていても、それでは、まだ十分ではない。さらに考えるべきは、心理学とのかかわりの在り方の差異としての、「生きる」と「眺める」との差異である。ここで、「生きる」と「眺める」の対象は、（X）では「心理療法」およびその＜混沌＞、（Y）では「心理学」およびその＜混沌＞、（Z）では、「人格心理学理論」およびその＜混沌＞と、確かに、相互に異なる。が、そのように、対象を異にしても、「生きる」と「眺める」の対比は、それぞれの内部において成立する、と私は考える。

ここで、「生きる」とは、「心理療法」にせよ、「心理学」にせよ、あるいは、「人格心理学」にせよ、それを対象的に、あるいは客体的に、距離をおいて捉えるのではなくて、自らの生において、それを心から信じ、主観化あるいは主体化し、＜生きられる世界＞の変容を齎し、自らの生き方の中核に取り込むような在り方を指示する。いわば、その知を血肉と化す在り方である。その典型的な在り方としては、＜知行合一＞すなわち＜なすべきことを知っていて、それを実行する＞および＜言行一致＞すなわち＜言葉に表すことも立派だが、それに留めず、言葉通りに立派に実行もする＞姿が、思い描かれるであろう。

これとは対比的に、「眺める」とは、「心理療法」、「心理学」あるいは、「人格心理学」を、対象的に、客体的に、距離をおいて捉えて、極端な場合には、知識とか＜情報＞としては知っているが、自らの人生の在り方をそこに賭けるほどには、信じているとは限らない在り方を指示する。この場合、したがって、自らの生き方の中核には取り入れないことはもちろん、自らの生き方とは無関係な、出来上がった理屈としてのみ利用しようとする在り方の可能性を指示する。その知は他者の力で既に出来上がっていて、いつでも利用できる与えられた便利な道具のようなものとして、利用したり利用しなかったりする道具として、受け止められるのである。そして、その極端な典型の在り方は、＜知行分立＞あるいは＜その知によれば、どうすべきかを知ってはいても、必ずしも、それに従って行動するとは限らない＞、そして、＜言行不一致＞あるいは＜その知によって言うことと、本人が現実に為すこととは、まるで矛盾する＞ことを少しも妨げない、という在り方である。

これは、本人がその＜知＞に＜信＞を賭けているか否か、＜心から信じている＞か否か、ということに関わる大問題へと繋がる。が、この問題のここでの展開は避けておこう。

＜生きる＞を促す心理学と＜眺める＞を促す心理学

心理学の学徒が、その＜学び＞において、＜生きる＞＜学び＞を選ぶか、＜眺める＞＜学び＞を選ぶか、ということは、その＜学び＞の対象となる心理学の性格によっても条件づけられることにも、注意しておきたい。

人間世界の心理を主題とする心理学（A）と物質世界の物理を主題とする物理学（B）とでは、それぞれの＜学び＞において、（A）は＜生きる＞ことを、（B）は＜眺める＞ことを、促すように思われる。ただし、この差異も絶対的でも固定的でもない。たとえば、心理学にも生理学的心理学があり、その＜学び＞は、生理学の＜学び＞とも、物理学の＜学び＞とも、＜生きる＞と＜眺める＞の対比の脈絡では、変わらないとも言えるからである。

そこで、人間科学的心理学（A）（"Psychology as a Human Science"）と自然科学的心理学（B）（"Psychology as a Natural Science"）とでは、（A）は＜生きる＞ことを、（B）は＜眺める＞ことを、促すように思われる、と言っておくことにしよう。

主観的心理学（A）と客観的心理学（B）とでは、（A）は＜生きる＞ことへ、（B）は＜眺める＞ことへと、誘うように思われる。

臨床実践心理学（A）と実験研究心理学（B）とでは、（A）は＜生きる＞ことを求める。臨床実践心理学が、ある先輩実践家によって創建されたとするならば、その心理学を＜再活性化＞するように＜生きる＞ことを求める傾向があるように思う。たとえば、臨床家C.Rogersと同じように物事を見たり感じたりすることが出来るようになることが、その心理学を＜生きる＞という仕方で学ぶことであろう。そのことは、Rogersが、来談者を＜共感的に理解する＞のと同じように、来談者を、そして、人間一般を＜共感的に理解する＞ことを＜学ぶ＞ことに重なって行くことであろう。それに対して、（B）では、学習者が、研究対象と同一化するなどということはむしろ禁忌であろう。学習者は、その心理学創建者と共に、研究対象を対象化し、客体化して、＜客観性＞を重視する科学者として、あくまで冷静に＜眺める＞ことを学ぶことが求められる。観察あるいは実験の対象からは、あくまで距離を置いて客観視して正確に厳密に＜眺める＞ことを求める傾向があるように、私には思われる。たとえば、Watson心理学を＜学ぶ＞に当たっては、学習者は、被験者と同一化して＜共感的に理解＞するのではなく、被験者を、Watsonと共に、客観的かつ冷静に、時には冷淡かと思える程に徹底して、＜眺める＞に徹することが求められるであろう。さらに言えば、仮に、＜ネズミ心理学＞の研究者が、その心理学によって、自らの人生の実存的な重大事を決定するとしたら、それは滑稽と言うだけでは済まされないであろう。「眺める」に留める必然性が秘められているのである。

このことは、一人称心理学（A）、二人称心理学（A／B）、三人称心理学（B）、の三者を対比させるならば、（A）と（A／B）とは、＜生きる＞ことを、（B）は＜眺める＞ことをその中心に置くことになるように思われる（吉田章宏、2002）。そこに既に紹介したことのある、城戸幡太郎、荻野恒一、戸川行男らの主張の再度の紹介は割愛する。

近年のGendlin, E.（2004）による「一人称心理学研究」への国際的な呼びかけは、この問題が、ようやく国際的にも注目されるに到りつつあることの表れとして、たいへん心強い呼びかけの声として、私には、響き聞こえてくる。

＜生きる＞を促すか＜眺める＞を促すか、多種多様な心理学の間で、大きな差異がある。

＜生きる＞を促す＜学び＞と＜眺める＞を促す＜学び＞

＜生きる＞＜学び＞となるか、＜眺める＞＜学び＞となるかは、しかし、対象となる心理学の性格だけで一義的に決まるものではない。それぞれの＜学び＞の性格によっても条件付けられている。それゆえにこそ、「知行合一」とか「言行一致」とかが、めざすべき在り方として、とりたてて、改めて唱えられる必要があるのであろう。それは、在るべき、あるいは、在ってほしい＜学び＞の在り方に向けての呼びかけである、と考えられる。

ここには、B.Jager（1999）が区別していた、（A）「通過儀礼」（世界変容）としての＜学び＞と（B）「進歩」（情報受容とその記憶と保存）としての＜学び＞との対比に対応する差異が認められる。

＜統合化＞の多種多様な道の可能性

心理学の統合化を考えるにも、多種多様の道があるように思われる。たとえば、S.Koch（Y）は、諸々の心理学の統合化を、一つ一つの心理学がその断片である「ジグソウパズル」（a jigsaw puzzle）の問題解決として提示し、「原理的に解決不能」な問題である、としていた。また、Hall & Lindzey（Z）は、それを「既存の諸理論の合併融合」（amalgamation）として提示し、それが少なくとも当時の段階では、望ましくないと述べていた。しかし、「統合化」にも、多種多様な道があり得るであろうし、（X）や（Z）が提示しているイメージで＜統合化＞の道の総ての可能性が尽くしされているとは、私には、到底思えないのである。したがって、それへの努力を肯定するにも否定するにも、その前に、可能性の探究こそが為されるべきである、と考える。

統合化への道というとき、その構想には、大きく分けて、少なくとも二つの可能性があるように思う。一つの道は、既存のものの内的地平を探究し、それらを何らかの仕方で＜分析＞し＜統合＞して、新たに一つの統合的なものを構築しようという構想の可能性である。たとえば、（Z）で、人格諸理論の「合併融合」と呼んでいるのは、その構想の可否そのものは別として、そうした構想の一つであろう。その結果生まれるのは、これまでの諸理論に加えて、これまでは存在しなかった一つの新しい「統合的理論」であろう。この構想の基本は、「人格理論」のみでなく、「心理療法」、「心理学」についても同様である。

もう一つの道は、既存のものの外的地平を探究し、既存のものの間の相互関係を探究し、既存のものの間の相互関係を解明することによって、既存のもののそれぞれはそのままに存続することを容認し許容しながら、それらの総てを一つの統合的な全体に位置づけて関係づけるという、そういう構想の可能性である。たとえば、（Y）で、心理学の諸学派の「ジグソウパズル」の解決と呼んでいるのは、これまたその可否はともかく、そうした構想の一つと言える。その結果生まれるのは、心理学諸学派の総てを含みその相互関係を明瞭に位置付けつつ「心理学」の全体像を示す「統合的心理学」であろう。やはり、この構想の基本は、「心理療法」と「人格理論」についても同様に妥当する。

仮に、前者を「統合化による一つの心理学」への道と呼び、後者を「多種多様な心理学を多種多様なままに統合する心理学」への道、と呼ぶことにしてみたい。

前者は、Kochのいうように、実現可能な道であるか否か疑問がある。さらに、仮に、実現可能であったとしても、それが、その実現が、すなわち、他の総ての可能な心理学の存在を排除して、一つの統合的心理学のみの存在のみを許容することが、果たして望ましいことであるか否かについても、Hall&Lindzeyの書いていたように、疑問が残る。それは、心理学を＜学ぶ＞側の人間の多種多様性に対して、また、人間の置かれる状況の多種多様性に対して、その一つの心理学がどのようにして対処可能であるかが、想像を絶する困難を予期させるからでもあろう。いずれにせよ、慎重な考察を要する問題点である。

後者は、実現可能であろうし、また、その実現が望ましいと、私は考える。その実現への道は、これまた、多種多様あると私は考える。ここでは、そのアイデアのスケッチだけを以下に描き、より詳細な展開は、次の機会に譲ることにしたい。

第一に、多種多様な心理学の相互関係を解明し、その解明の成果を、空間的に、あるいは、共時的に、比喩的に言えば、＜地図＞として表現する道が考えられる。それは、比喩的に言えば、総ての心理学をそのままに受け入れて活かしつつ、その総てを一つの全体地図へとまとめて行く道である。その地図は、いわば、＜町村地図＞から、＜各国地図＞から、＜世界地図＞へ、さらに、＜太陽系地図＞、＜銀河系地図＞さらには、＜宇宙地図＞へと、構想を拡大し発展させることも出来よう。それは、現実に存在する諸々の心理学から、さらには、可能的な心理学を地図に描き込むと同時に、未発見の可能的な心理学を発見する仕事も含み込むことになる。現在の時点で既に存在している心理学だけに限らず、考えられうる心理学の可能性を展開する地図、いわば未開拓未踏の地も描かれている地図を作る仕事になる。そうした、未発見の心理学を位置付けることにより、Kochの言う「ジグソウパズル」の解決も、かえって、可能になるのかもしれない。さらに、比喩的に言えば、平面地図から立体地図、あるいは、可能的な心理学の多次元的地図を構想する道も、構想されうる。パズルは、別次元の導入により解決可能となることがあるからである。そして、どの地図も、どこで描かれたか、いつ描かれたか、により変

化する。大航海時代の新大陸発見以前と以後でも、描かれたのが旧大陸か発見以前の新大陸かでも、異なる。

第二に、多種多様な心理学の相互関係を解明し、その解明の成果を、時間的に、あるいは、通時的に、比喩的に言えば、<歴史>として表現する道が考えられる。これも、現実の歴史を、限定された視点から、描くことが先ず考えられる。しかし、それだけでなく、それを基礎として、「想像自由変更」によって、さらに、可能的な歴史、虚構による歴史を描く道も構想されうる。H.Hesseの『ガラス玉遊戯』が連想される。これは、上記の、共時的空間的な「可能的な心理学の多次元的地図」を通時化あるいは時間化あるいは歴史化して展開する道である、とも言える。<歴史>は、それが書かれる時代、文化、社会、…により変化する。戦前の「国史」と戦後の「日本史」の差異が、このことを証明している。

第三に、上記のような「可能的な心理学の多次元的地図」の現実的あるいは虚構的世界を生き抜いて行くひとりひとりの個人の、「個人の旅行記録地図」を総合する「実存的旅行地図」を収集し、それらを編集し統合して全体地図を構成するという構想が考えられる。

そして、第四に、「可能的な心理学の多元的歴史」の現実的あるいは虚構的世界を生き抜いて行くひとりひとりの個人の、「個人の旅行記録物語」「実存的旅行物語」を収集し、それらを編集し統合して全体的物語を示すという構想が考えられる。

地図も物語も、それぞれの個人の歩んだ旅路により、時と共に多種多様に変化する。

第一と第二の構想が、それぞれ「客観的地図」あるいは「客観的歴史」に対応するとすれば、第三と第四の構想は、それぞれ「主観的地図」あるいは「主観的歴史」に対応するとも言える。対応する第一と第三、第二と第四、とが相互に補い合って、それぞれ安永浩の言う「A／B」を構成することになる。さらに、<第一と第二>と<第三と第四>の組み合わせも同様である。これは、また、霜山徳爾の（X）を、各個人について、空間的にも時間的にも展開し、それを組織化したものともなるであろう。「個体発生は系統発生を繰り返す」などと簡単には言えないが、そうした観点も、自ずと浮かび上がってくる可能性もあろう。

ここには、先に言及した渡辺二郎による、歴史の哲学に関する、<超越的歴史観>の崩壊から、<内在的歴史観>の克服を経て、<実存的歴史観>に至る大局観が強力な示唆を与えてくれるであろう。さらに、これらにそれぞれの道の展開については、例示的な具体例も考えられる。さらに、<現実性>、<可能性>、<必然性>の相互関係を考える方向への考察の展開も予期される（吉田章宏、2008）。ここでも、「学問的研究の本質は、連続的なものを不連続に、不連続なものを連続にすることに存する」、というポアンカレからJ.ピアジェに引き継がれた言葉の思想が、生きてくるであろう。

おわりに

ここで、時間も尽き、予定の紙幅も超えた。次の機会には、「心理学における多種多様な<学び>の可能性」と「<統合化>の多種多様な道」について、さらに詳細かつ具体的に展開したいと願っている。本稿の執筆過程で、次の展開に向けた幾つかの興味深い発見もあった。次の執筆の機会を、わくわくした思いで心待ちにしている。ご期待を乞う。

文　献

蘆田恵之助（1973）『教壇と教式・綴り方教授』明治図書

ウエモフ、ア、イ（1962）「自然科学の発展における若干の傾向とその分類の原理」、寺沢恒信・出かず子訳、寺沢恒信・林礼二編『現代ソヴィエト哲学　第七集』合同出版

ジオルジ、A.（1990）「現象学的心理学の今日的諸問題」、吉田章宏編集・翻訳、『人間性心理学研究』第8号、3-15

霜山徳爾（1989）『素足の心理療法』みすず書房

武田常夫（1971/1990）『真の授業者をめざして』国土社

ルビンシュテイン, S.L.（1960/61）『存在と意識』上下　寺沢恒信訳、青木書店

ルビンシュテイン, S.L.（1981-86）『一般心理学の基礎』全4巻、秋元春朝、秋山道彦、天野清、足立自朗、松野豊、佐藤芳男、吉田章宏・共訳、明治図書

ヤーガー, B.（1999）「自作農場から都市へ：教育の二つの基本概念」吉田章宏訳『学ぶと教えるの現象学研究 八』中田基昭編、東京大学大学院教育学研究科、学校教育開発学コース、1-33

吉田章宏（2002）「心理学研究方法論をめぐる省察：心理学の人称性；我、汝、誰彼の心理学」淑徳大学大学院研究紀要、第9号、43-56

吉田章宏（2008）「多様化を通じての統合化の原理」淑徳大学大学院総合福祉学研究科研究紀要第15号、21-64

渡邊二郎（1999）『歴史の哲学：現代の思想的状況』講談社

学術文庫

Gendlin, E.T. & Johnson, D.H. (2004). *Proposal for an international group for a first person science* [Internet page]. New York: The Focusing Institute. From http://www.focusing.org/gendlin/docs/gol_2184.html

Giorgi, Amedeo (1970) *Psychology as a Human Science: A Phenomenologically Based Approach*, Harper & Row

Hall, Calvin S. & Lindzey, Gardner (1957) *Theories of Personality* John Wiley & Sons

Koch, Sigmund, ed. (1959-63) *Psychology: A study of a science, 6 vols. McGraw-Hill*

Koch, Sigmund (1999) *Psychology in Human Context: Essay in Dissidence and Reconstruction.* Edit.David Finkelman & Frank Kessel, The Univ. of Chicago Press

Smith, David L. (1983) History of the Graduate Program, in *Duquesne Studies in Phenomenological Psychology*, vol. IV. eds. Amedeo Giorgi & others. 257-319 Duquesne Univ.Press

Yoshida, Akihiro (2000) A Phenomenological Explication of the Lived Worlds of Application System Engineers: a tiny attempt. *The Journal of Kawamura Gakuen Woman's University*, Vol.11.No. 1. 69-86